

週日の説教

金 大烈 神父 2008年7月29日(火)

《愛とは何でしょう》

今日は、第一朗読も福音も黙想のできる素晴らしい中身を持っています。第一朗読のヨハネの手紙(4・7-16)の中身を見るとテーマは愛です。

「神は愛である。そして神を今までに見た人は誰もいない。しかし、あなたがたのうちにもし愛そのものがあれば、その中にはイエス様(神様)がいらっしゃる。あなた方は生まれる前から愛されたのであるからあなた方も愛するべきである。そしてその愛は命につながる」

しかし、どんなによい言葉でも、あまりにもたくさん聞いてしまうとその意味を失って、薄くなってしまふのが自然な流れではないかと思ひます。たとえば、歌謡、歌曲、オペラなどあらゆる種類の歌を見ても、たぶん8割くらいは、愛が主題となつて歌われているのではないのでしょうか。“恋について”とか“別れの歌”など自分が体験した愛について歌っていますね。

皆様、私たちは愛というものをどのように理解しているのでしょうか？愛とは何でしょう？愛という言葉がわからない人は一人もいませんよね。外国人でも“愛”の字は書けると思ひます。では、愛とは何ですか？これについて私たちがはっきり理解していなかったら一番大きい戸惑いが生じます。

皆様もそして私もこの世の中の人間はいつか神様の前に立ちますね。その時、イエス様はどのような質問をされると思ひますか？私は、イエス様はただ一つのことを聞かれるのではないかと思ひます。「愛について本当に分かりましたか？」「本当に人を愛しましたか？」という質問です。そして、そういう質問に対し、「はい、できました」と答えるか、「はっきり分かりません」と答えるか、「いいえ、私はできませんでした」と答えるか。この三つの答えの中の一つが私たちの口から出るのではないかと思ひます。

イエス様は、「あなたは王子であつたか？王女であつたか？司祭であつたか？大学を卒業したか？」そのようなことは絶対聞かれなから思ひます。きっと「あなたは、私があげたその力で本当に愛を経験して来ましたか？」と質問されるのではないかと思ひます。そして、それが私たちの救いの道なのです。私たちは奉仕の仕事、施し、正義、平和、信仰のためにいろいろと働きます。しかしその働きの動機(モチベーション)が愛でなかつたら、それは結局何の意味もないものになってしまうことを意識すべきではないかと思ひます。

私は皆様を愛しています。皆様も私を愛していると思ひます。この言葉についてどのくらい自信がありますか？それを理解できますか？ある人は、とてもよいことをしているのに、その中には愛と似ているものが見られませぬ。そういう人がかなりいます。そのような人を注意深く見てみますと、まず傷が見えます。そして、自分のために、自分の行いが相手のためのものであるかのように飾り立てます。しかしそういう人々は、何でもなから思ひましたか？と質問されるのではないかと思ひます。そして、それが私たちの救いの道なのです。私たちは奉仕の仕事、施し、正義、平和、信仰のためにいろいろと働きます。しかしその働きの動機(モチベーション)が愛でなかつたら、それは結局何の意味もないものになってしまうことを意識すべきではないかと思ひます。

皆様、愛という言葉は、私たちがあまりにも簡単に聞いたり、使つたりしたので、その意味が薄くなってしまつたように感じられます。絶対に変わらない愛とはどういふものなのか、その意味についてよく考えてみましょう。愛は、利己的なこととは違ひます。それは嬉しく犠牲を払ふことです。犠牲を払ふことがそんなにつらくないことです。少し損になつてもそれが悔しい気持ちにならなから思ひましたか？と質問されるのではないかと思ひます。そして、それが私たちの救いの道なのです。私たちは奉仕の仕事、施し、正義、平和、信仰のためにいろいろと働きます。しかしその働きの動機(モチベーション)が愛でなかつたら、それは結局何の意味もないものになってしまうことを意識すべきではないかと思ひます。

しかし、いつも相手に対して条件をつけてしまうのが、私たちの弱さではないでしょうか。私はこれをしてあげたのになぜあなたはこれをしてくれないのか？ 私はあなたを守ってあげるのになぜあなたは私を守ってくれないのか？ 夫婦喧嘩は大抵そういうものではないでしょうか？ しかし、それはある意味で子どもっぽい愛の形です。それを乗り越えて、相手が自分を悲しませてでも自分が愛することには積極的になり、ある意味では気分的で一番自然な形の愛を持つことができるようになれば、いろいろ難しいことがあってもたぶん何とか乗り越えることができるでしょう。それが第一朗読を読んで黙想してみたことです。

そして、今日はマルタとマリア姉妹の物語がありますね。うちの教会のおよそ3分の2くらいの女性はマルタの傾向にあります。そして3分の1くらいがマリアの傾向ではないか思います。しかし、イエス様に叱られたのはマルタのほうでした。イエス様は彼女に、「あなたの妹は本当によい方を選んだ。それをうばってはいけない」とはっきりおっしゃいましたね。人間的にこの物語を読んだら、私たちはマルタのほうに力を入れたくなります。でも、考えてみてください。二人の姉妹がいます。そして姉妹の本当に好きな人がいます。二人は、彼と話しをして喜びを感じたい。だから姉は一人で、その人のためにもてなしの準備をします。心はものすごく忙しくなります。しかし、妹は彼の足元に座って、笑顔で王女様のように話をしていたら、準備をしている姉の気持ちはどうなるでしょうか？ 妹が憎らしくなりますよね。私たちはそういうことで友だちや姉妹や兄弟をよく批判していますよね。

今、二人はともに聖女となりました。マルタは活動宣教をする修道会の模範、マリアは観想修道会の模範とされています。これは、人によってそれぞれ自分に与えられた方向があること、それに対して感謝しようとする、を意味しています。そして本当にイエス様が好きであれば、マルタは嫉妬をするのではなくて、妹が自分のかわりにイエス様を楽しませてくれることを喜ばなければいけないことも示しています。しかし私たちには、そうすることがなかなか難しいですよね。もし二人が一生懸命にもてなしの準備だけをすればイエス様は何をするのでしょうか？ だから、役割は分担しなくてはいけません。マルタは自分に都合のよいことを言って、自分のことを言い訳しようとしていました。しかし、彼女の無意識の中には100%ねたみがありました。その同じねたみを私たち人間はみんな持っています。もし妹がもてなしの準備をして、姉のマルタがマリアと同じようなことをしたら、マリアもマルタと同じことをしたと思います。イエス様ははっきりおっしゃいました。「必要なものはただ一つである。マリアはよいほうを選んだ」と。

皆様、本当によいほうを選んでください。それは回りを意識する必要もなく、絶対にゆずれないというものです。夫婦の関係、親子の関係、友の関係とか信仰の関係でもゆずってはいけないものが必ずあるはずです。

さあ皆様、今日のミサを通して、マルタの模範、マリアの模範が、私たちの従うべきものであることを認めましょう。そして、その二人が見せた役割について、自分がどちらに傾いているか考えてみましょう。それが判断できたならば、自分の傾きを生かしてください。きれいに素晴らしく生かしてください。神様が自分に与えてくださった素晴らしい賜物を生かそうとする恵みを求めましょう。

ありがとうございました。